

全科協ニュース

おもな内容：◇特別展「肥前歴史の旅 佐賀 400 年をたずねて」——幕末の科学技術資料の中から—— 佐賀県立博物館 尾形善郎 ◇特別展示「海洋開発展」について 船の科学館 小見秀男 ◇新しい展示 栄養計算機 神奈川県立青少年センター 石川光則 ◇全科協北から南から 植物展示資料—植物模写—について 神奈川県立博物館 秋山隆司, このころ思うこと 農林省蚕糸試験場 佐藤忠一 ◇会員館園の紹介 斎藤報恩会自然史博物館

〔特別展〕

「肥前歴史の旅 佐賀 400 年をたずねて」

—幕末の科学技術資料の中から—

佐賀県立博物館

第31回国民体育大会(昭和51年度)が佐賀県で開催されるにあたって、その一環としての芸術部門「国体芸術展」を当館が担当することになった。この国体実施の方針が決定して以来、当館では国体芸術展の主題が課題となった。結局「佐賀の歴史」を全国から来県される皆さんに紹介しようということに決まったのは昨年のである。

そもそも佐賀県は、西南日本の辺境の地にあり、現在人口82万(全国41番目)、面積7,100km²(全国42番目)の極めて小県ではあるが、幕末維新期では、日本の黎明期の文化の形成にはあらゆる部門に大きな役割を果たしている。

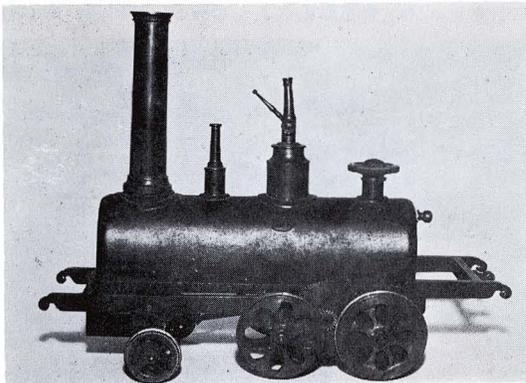
このたびの展観では、そのことを「物」を介していか

にそれを紹介し得るかであった。科学技術の面からいえば、佐賀藩は諸藩に先んじて鉄製の大砲を鑄造し、長崎及び品川の台場に砲備して、緊迫した世情の中で諸外国の来航にそなえ、国防の第一線に立っていた。また精煉方(理化学研究所)を設けて、分析化学をはじめ火薬、ガラス、写真、製紙など11部門にわたる研究がなされていた。一方、医学の面では、伊東玄朴をはじめ多くの蘭学者によって西洋医学の普及と、相良知安によるドイツ医学の採用、あわせて佐賀医学校の歴史があった。しかし、これらを立証すべき物的資料は極めて少なく、その発掘には急務を要したのである。

結局、短期間での資料調査で得たものは、聞き込みや偶然による発見も多かったが、一つの執念が実ったといえる。

佐賀藩が鑄造した鉄製大砲の所在を求めて上京し、また各地に問い合わせても回答は零。しかしある偶然の機会で昨年12月8日東京でその1門の存在が確認された。また精煉方の一員、田中久重が製作した「須弥山儀」(東京の国立科学博物館にある万年時計の原型といわれる)がまわりまわって熊本の時計店に保存されていた。

一方、蒸気機関の開発については、嘉永6年(1853)ブチャーチンの旗艦ハルラータル号でたまたま蒸気車の雛型が走るのを見た精煉方の一員がそれをもとに安政2年(1855)日本最初の蒸気車雛型に成功するのであるが、ハルラータル号で走った雛型と同型式とみられる舶来のものが萩市立郷土博物館に所蔵されていた。佐賀藩ではもともと藩主鍋島直正の考えとして帆船時代から季



佐賀藩精煉方製造蒸気車雛型
全長39.7cm, 全高31.2cm

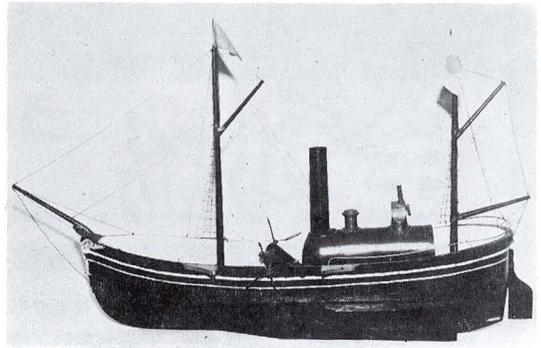
節風に影響されない蒸気船の時代を予知していたのであって、その試験的過程がこの蒸気車雛型で、この実用化は慶応元年に建造された蒸気船「凌風丸」として結実したのであった。

佐賀藩が当時日本の科学技術の先端である鉄製大砲の鑄造に成功したことは、藩主鍋島直正の偉大なる施策の一つであるが、科学知識に関する歴史も見逃されない。

わずかではあるが、それ等に関する資料の展示は天和3年刻銘、星座板の「分度規矩」をはじめ、「天明8年改、渾電儀」の箱書きのある「渾天儀」、また舶来品として1700年代の銘をもつ「六分儀」、「望遠鏡」、「天球儀」、「地球儀」及び相当年代の「顕微鏡」などをあげた。

一方、科学技術の導入に大きな役割を果たした蘭学関係資料としては、佐賀本藩に732部(約1,000冊)の蘭書があり(現存約200冊)、武雄鍋島家には138冊の蘭書が現存しているのを全部展示した。

この中にはショメールの「百科辞書」、ハルマの「仏蘭辞書」、ウエーランドの「技術辞書」、トロムスドルフの「薬物の実験的分析教程」など注目すべき書籍が多い。また大庭雪斎の訳になるカルテンの「海上砲術全書」、ヘルデルの「算学算法基原或問」、イサブレンキの「体液究理分離則」、ナチュルデ重詔の「民間格致問答」があり、精煉方で火薬製造テキストに使用したとされるセッセレ



佐賀藩精煉方製造蒸気船雛型
全長68.2cm, 全高52.5cm

ルの「泰西砲術集要大全」(13冊)や「トンメル分析表」の河野偵造「舍密便覧」、ウィットステインの「製薬化学書」などをあげることができる。

しかし、これ等は幕末佐賀の技術を解明する資料のほんの一端で、端的にいて200門近くの鉄製大砲を鑄造したその鉄鉋の具体的な移入の過程さえ明確にされていないのであって、精煉方の具体的な組織や研究の実態、諸藩との技術の交流等、今後多くの課題が残されていることを痛感するのである。

(尾形善郎)

特別展示「海洋開発」について

船の科学館

当館では、開館以来、春と秋の年2回、小規模であるが(会場の展示床面積190㎡)、企画展示を開催している。春は5月20日の「東京港開港記念日」にちなんで、テーマとして東京港をとり上げ、その歴史、現状を紹介し、秋は常設展示場でカバーしきれないでいる、船と私たちの生活の結びつきを見ていただくため、数回の展示

を企画してきた。ちなみに昨秋は、「船旅」をとり上げて展覧会を開催した。

ここで今秋の展示として企画した「海洋開発」について紹介する。(期間は10月30日～11月29日、33日間)

「海洋開発」という言葉からは、私たちは一般に壮大なプロジェクトを連想するようである。海に高いやぐら



コーナー「海をさぐる」



コーナー「海を利用する」

が生まれ石油を掘る、海中で大規模な海底施設が建設され、それを基地として、海洋、鉱物資源を探る等、その未来像を含めて心にかぶはずである。なにか私たちの生活と直接に結びつくことがなく、SF小説を読むごとく、日常性とは何か無縁であるような、これが一般的傾向向ではないだろうか。

今回の展示ではその主旨を「私達の生活と海」というテーマにしぼり、次の3つのコーナーを設けた。

- 海のすがた。
- 海をさぐる。
- 海を利用する。

第一のコーナー「海のすがた」では、海が地球上の面積の7割を占めていることを視覚的に確認していただくため、直径60cmの地球儀の展示で導入とした。破損を覚悟したけれども何とか会期中もちそうである。「すがた」を知るための観測機器とその原理を紹介し、結びとしてその成果たる、太平洋、大西洋、インド洋の海底地形図を展示した。「海をさぐる」は、私共が力を入れたコーナーである。海の中を自分の目で見て確かめたいという人類の願いは昔から存在していたようである。伝えられるアレキサンダー王の潜水など、その試みは数多く記録されている。代表的な6例を時代順に絵パネルで紹介した。子供たちの人気を集めていたようである。また、このコーナーでは、各種の潜水器附属器具を展示した。重量が片足15キロある潜水用の靴を子供たちに持ち上げさせ、さらに自由にはいってもらった。ただただその重さにみんな、おどろいていたようだが、海にもぐるにはな

ぜこのように重い靴が必要なのか、自分たちが陸上ではいている靴との比較を通して海中の環境を考えるヒントにしてもらいたかった訳である。「海を利用する」では、現在、日本で進行している海の利用の方法について、各種模型、パネルによって紹介した。マンガン塊は入場者の注意を引いたらしく、質問をいくつか受けた。

以上のコーナーとは別に会場内にVTRの装置を設置し、海洋関係のソフト（海洋博における日立海洋図書館と同一ソフト）を適時放映した。

なお、この催しの一環として11月8日、東京港、第三台場付近に碇泊していた海上保安庁所属の測量船、昭洋（1841トン）の見学会を実施したところ、小学生200人の参加があった。普通の船と違って、観測、特殊機器がいっぱいの船内で、機器の動作やデーターなどを乗組員の方々に説明していただき成果が上がったと思う。この紙面を借りて厚くお礼申し上げたい。

主な展示

- アクアポリス模型
 - 第三白竜模型
 - シートピア（海底居住基地模型）
 - 海中調査船「はくよう」模型
 - 測量船「昭洋」模型
 - 潜水用ヘルメット（3種）
 - 潜水用スーツ（各種）その他附属器具
 - 波力発電用ウイ（実物）
 - 海洋観測各種機器、マンガン塊（実物）等 35点
- （小見秀男）

全科協北から南から

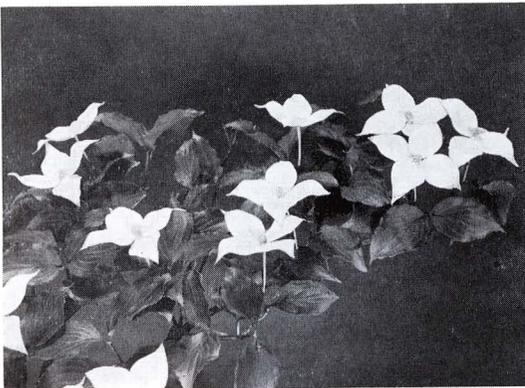
植物展示資料—植物模型—について

神奈川県立博物館 秋山隆司

博物館資料の展示についてその理論と方法は、多くの研究者が論じており、それぞれの館ではその性格や目的などにマッチした展示を公開している。しかし、博物館職員の努力にもかかわらず、一般大衆（入館者）にどの程度理解されたか、興味をもってくれたかなど、展示に対する評価はきびしいものがある。

この展示の良悪を決定づけるものは、ディスプレイなどさまざまな要因が考えられるが、やはり展示資料の質自体が最も大きな比重を示すものと思われる。展示された資料から受ける強い実在感のイメージは、人文系・自然系を問わず、見る人に感銘を与え、精神生活の一つのインパクトになることが望ましい。美しいものや身近に

（P 6へつづく）



ヤマボウシ

【新しい展示】

栄 養 計 算 機

神奈川県立青少年センター

1. 製作の動機

昭和41年にカロリー計算機の名称で30種類ぐらいの食品のカロリーを加算できる機械を置いたところ、割合に人気があった。その後、肥満児が社会的問題となり、来館者の質問などからもカロリーだけの表示ではかえって誤解を招くおそれもあり、また一方、環境や衛生の問題をもっと正面から取りあげるべきだという意見もあった。そこで昭和48年に、

① 日常の食生活が栄養の面から片寄っていないかどうか、調べることができること。

② 短時間に誰でもたやすく操作することができることを目標に、カロリー計算機を納めた三進製作所（東京）と協同して、新しく栄養計算機を開発することになった。

2. 栄養の計算

これはコンピューターでも使えば、いくらでも精密に計算できる性質のものだが、展示の場合、そんな精密な計算は必要でない。第一に、その日に何を食べたか、ちゃんと覚えている人は意外に少ないものだ。それに栄養書などには、よく牛肉 100g が何カロリーなどと書いてあるが、牛肉を食べても、それが何gなのか見当がつかない人が多い。従って栄養の計算は料理学校などでやらない限り、一般人にはなかなか難しいものだ。私たちは県の栄養短大の専門家を訪ね、茶わんの大きさからライスカレーに入っている肉の量まで、献立の話は何時間も飽きずに繰り返した。その結果、

① 被験者に提示する食品の種類は、ごはん、卵など献立の要素、またはその材料となるもの58種、ラーメン、オムレツのような料理42種（菓子2種を含む）を精選し、計100種とした。これは少な過ぎても実用にならないし、多過ぎても展示のスペースや被験者が選択する時

間を考えると結果的に良くないという判断である。

③ 計算する栄養素は、カロリー、蛋白、カルシウム、鉄、ビタミンA（実効単位）、ビタミンB₁、B₂、Cの8つをとる。

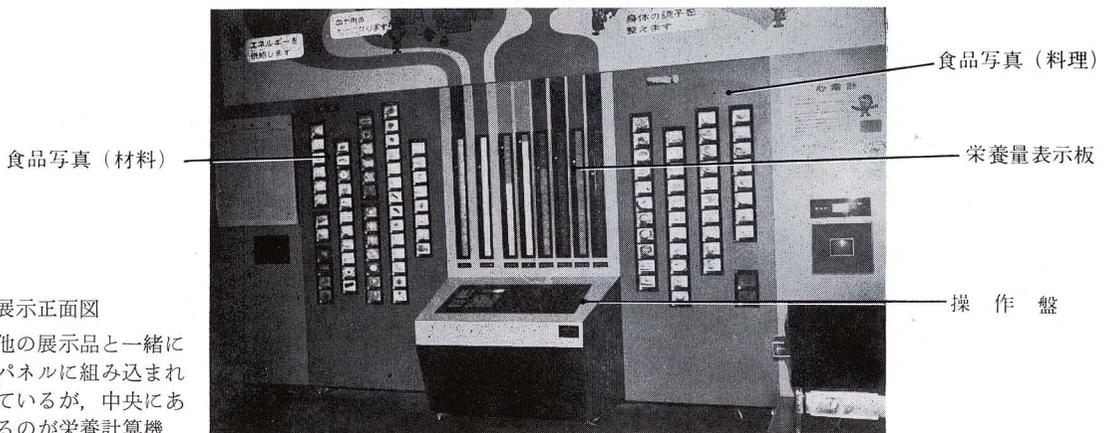
③ 各食品は標準的な量を提示し、この量について上記栄養素を計算する。被験者は日常摂取している1日分の食品を選んでキーを押せば、摂取している上記8つの栄養量が加算提示される。ただし、この量の2倍食べている人はキーを2回押せば加算される仕組にする。そして、このような計算方法で、個々の食品に含まれる栄養量の誤差がほぼ平均化されるという考え方である。

次に栄養の過不足を示すには、被験者に必要な栄養量を提示しなければならない。細かく考えれば、ここにも複雑な選択枝がある。しかし、「カロリーが足らなければ、腹が減るから自然にわかります。栄養の偏りは直ぐ気がつかないところをチェックできなければ……」という専門家の指導に従い、男女・年令の別だけで栄養の必要量を示すことにした。ただし年令は6才から20才までだが、20才以上は20代、30代……の粗いきざみで十分である。なお、選択枝が少ない方が被験者の操作も簡単で、回路の経費も安上りという利点もある。

3. 展示の工夫

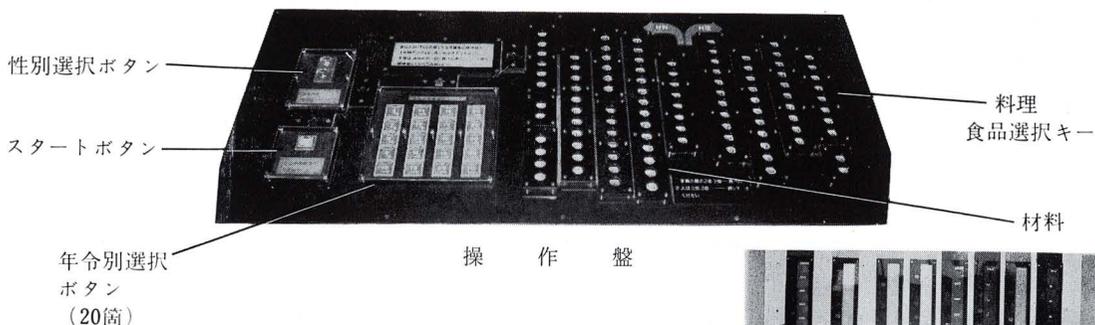
被験者が間違えず簡単に操作できて、しかも全体的にわかりやすいことに注意した。

① 食品100種の標準量の提示は100枚のカラーコルトンに仕上げ、適当なセクションを設けて左右に配置した。被験者はこの写真を見て、操作盤の相当キーを押せばよい。写真の量の倍食べているときは2回押すという仕組である。この食品の写真原板を製作するについて三進製作所の担当者は、自分でその分量の材料を買ってき



展示正面図

他の展示品と一緒にパネルに組み込まれているが、中央にあるのが栄養計算機



で料理したり、あるいは注文して取り寄せたりして、食べる前に写真を撮ったとのこと、おかげ様で随分いろいろなものを食べましたと言って笑っていたが、展示の仕事は思わぬところでたいへん手数のかかるものである。

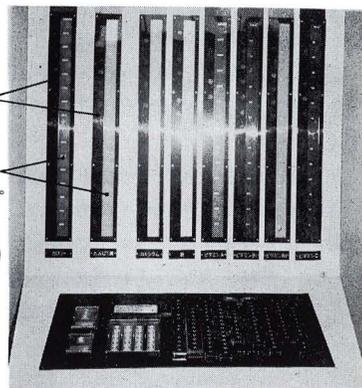
② 被験者の摂取量と必要量の比較をどうするか。これについてもいろいろな案があったが、最終的に8つの栄養素ごとに色分けした棒グラフで示すことにした。必要量はこの棒グラフの左側にある矢印ランプで示され、被験者が食品のキーを押すと、各棒グラフの下から順に摂取量に応じてランプが点灯していくという仕組みである。

③ 被験者の押すキーは真中の操作盤に配置してある。スタートのボタン（リセットも兼ねる）を押すと、あとは矢印の順に性別と年齢のボタンを押せば、直ちに必要量を示す8つの矢印が点灯する。食品のキーの配列は、写真を見ながら押せるように同一の配列にしてある。

4. 回路

各栄養素の棒グラフ表示はアナログな形にするのは難しいので、カロリーなら200単位、蛋白質は15g単位というふうにデジタルにしてある。従って各食品の栄養量の計算も最終的には全てこの単位に直して回路に入れることになる。実際に各食品の計算値を上記のような単位に丸めて、大部分がそんなに大きな誤差にはならないのであるが、ちょうど単位量の半値に近いものについ

必要量を示す矢印ランプ
 摂取量を示す棒グラフランプ
 (白く見えるのは) 単位数字



栄養量表示板

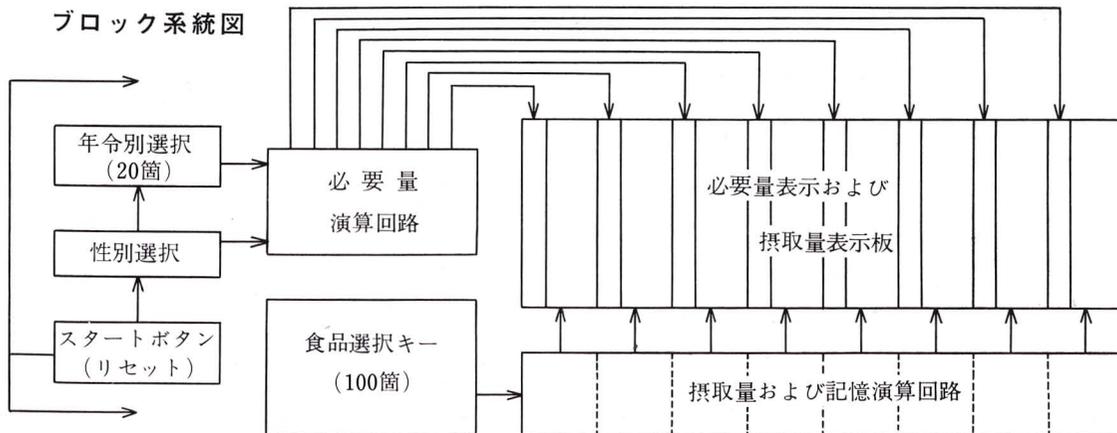
ては、この差が無視できないので、記憶回路を設けて2ビットで1単位上るようにした。回路のハードの面では特に大きな工夫はないが、演算ICとストリックスとリレーを経済的に使用し、また、ICの故障箇所が速くわかるように発光ダイオードを使ったチェックポイント板を1か所にまとめた。

5. むすび

完成してから3年ぐらいい経過したが、たまにスイッチの接触不良があるくらいで順調に動作している。実際に使ってみて、栄養が不足と出る場合が多いが、普段の食生活の中で細かいものが入力として落ちてしまうのか、もう一度数値など洗い直してみたいと思っている。

(石川光則)

ブロック系統図



(P 3から)

存在するものなどは、興味も深まり、印象が強く残るが、そうでないものはそのものの意味に気づかれずに、見逃されてしまう可能性が高い。

まず「もの」を見てくれることがその第一歩である。展示物の前を素通りされたのでは全く意味がない。「もの」を人にひきつける魅力をもたせなければ、その効果は非常に弱くなり、一部の研究者、好事家やその分野のファンに喜ばれるだけになってしまう。

自然部門の展示資料で最も一般的でありながら、展示効果を向上するために苦勞しているものは「植物資料」ではないか。

植物体は構造上水分を多量に含み、生きたままの状態の保存がはなはだ困難なものが多い。従って普通は腊葉標本として収集・保存されている。このため植物の展示資料は、保存されている腊葉標本が主体となり、不足分を生態写真などで補っているのが現状である。この展示を見ると、俗にいう「枯葉展示」となり、さわやかな葉の緑色、美しい色彩感のある花の色など全く見る影もなく、立体感、生命感が失われている。一部の研究者には興味を与えるが、一般大衆の目を捕えることはできな



エイザンスミレ

い。また、生の植物の展示は植物園などを除くと、一般の展示施設では障害があまりにも多く、長期にわたる展示では管理が難しくなる。これらのウィークポイントを補うために、本館では「植物模型」を展示に活用しようと10年前の開館時から試みている。

<その1>本館は昭和42年3月に開館し、自然系展示で例えば「富士箱根地域に特有の植物」では、サンショウバラ・フジアザミ他27点の植物模型を原寸大、原色で再現し、臨場感あるジオラマに構成し展示している。この方式は新しく開館した館園に多く使用されていることは承知の通りである。また、分類展示ではキノコ類の標本模型を40点展示している。

<その2>昭和48年7月に特別展「丹沢の自然」を開催した。そのなかで植物部門は丹沢の自然の魅力——森林美から樹木を選んだ。高い樹上に咲く花は人の目につきにくいので、ヒコサンヒメジャラ・ヤマボウシ他数種の花を模型に製作し、生態写真とともに身近に見られるように展示して好評を得たと自負している。

<その3>若干PRめいて恐縮であるが、52年3月に特別展「日本のスマレ・世界のスマレ」を国立科学博物館の後援により開催予定で準備を進めている。このスマレ展には2年計画で、スマレ類の全形模型28点を製作し、また、スマレの花は小さくてその構造が理解しにくいので、オオバキスマレの花の拡大模型(約20倍)などを展示する予定である。この可憐なスマレの生態模型をぜひ御覧のうえ、御指導、御批判をいただければ幸いである。

しかし、植物模型の製作にも難点がある。それは製作を引き受けるメーカーが限られていることと、製作費が高価なことである。従って、あらゆる植物を模型化することは不可能であり、今後も植物資料の展示にあたり、担当職員の創意工夫が要求されることになる。もしもこれを克服できるならば、博物館が植物の立体図鑑の役割を果たすこともできるのではないかと考えている。

こ の ご ろ 思 う こ と

農林省蚕糸試験場 佐藤忠一

「蚕糸試験場?」「何をするとおですか?」「カイコ?」「ああ天の虫って書く蚕のことネ」。よく人にこんなことを聞かれる。

また、この辺の事情に対し明るい人は、「確かに生糸はかつてわが国輸出貿易の最重要物資として近代日本の

国勢伸長に大いに貢献したけど、近ごろの輸出入物資の大半は電子機器や重化学工業によるものが多いから蚕糸業の使命は終わったんではあるまいか」と問い、いわゆる「蚕糸斜陽論」を吐く。

わが国農業また蚕糸業の位置づけについては多くの意

見がありますが、ここでは日ごろ私が考えていることを当場に付置されている「展示室」とも関連させて述べてみたい。

みなさん既に御存知のように、蚕糸業は桑と蚕という生物の生産力を利用し、その生産物を工業的手法を用いて最終生産物である絹まで加工するところのユニークで一貫した技術体系であります。

当場はこれら生産過程で惹起される問題を分析し、その解決のために生産現場へ技術素材を提供しつつ技術と科学の発展に寄与する使命を担っています。

もとより産業省付属の研究機関はその拠って立つ産業基盤とは無関係に存立し得ない訳ですが、試験研究段階においては時の行政や業界の動きを物差しとして研究課題を設定するような、いわゆる二者択一の思考や態度は排されるべきでしょう。ある技術のメリットが発揮できる条件は社会経済的条件とともに変化するのであって、技術は常に豊富に用意しておくことが必要と考えます。このことは本年における水稻の例年にない不作でその感を深くしました。

古来、稲作と並んで日本農業の基幹作物たる養蚕——カイコは人間とのかかわり合いが古く、現在農家で飼育されている蚕は長い年月にわたり改良されてきたものです。蚕の卵色、卵形、体色、体形、繭色、繭形は多種多様で、その成長過程及び生命現象は研究材料としても重要で、蚕糸学はもとより遺伝学、昆虫学、生化学等の学問・研究の発展に寄与してきたことはここで述べるまでもありません。

200㎡ほどの当場の展示室は、「カイコ」を中心にこれまでの技術創出過程及び技術が成立した背景を整理し、現在の試験研究の成果とそれに基づく技術を紹介し、更には将来の技術方向を明らかにすることにより、蚕糸業における試験研究の意義と目的、当場の果たす役割について蚕糸関係者のみならず広く国民（地域住民）の理解と協力を得る目的で設置されています。来観者数は年平均5,000人内外で、このうちの半分は科学技術週間の一般公開に集中しています。来観者の来場目的、興味、関心の対象は多種多様なうえ、時として蚕一製糸一絹加工と広範囲にわたることがあるため応対に困ることがあります。

本来、国の機関にあってはおおよそサービス機関の性格をもたされており、当場の展示室もこの域外にはありません。

サービス機関に対する情報サービスの需要は、サービス機関自身が作り出すものとされています。確かに情報の受け手にとってはチャンネルが用意されてこそ初めてその需要が発生する場合が多いことは経験的にはっきりしています。これら情報チャンネルを豊富に準備しつつ、情報伝達のための手法も開発しなければと考えています。

近時、養蚕は産業の中に数えられなくなったかも知れませんが、「産業は古いのが故に滅びるものではなく、技術革新のない産業が滅びる」というある識者の言葉に励まされつつ、蚕糸研究の発展と展示室の充実を期して意を強くしている今日このごろです。

会員館園消息

〔新入会〕

（購読会員）

西尾時一 ☎ 607 京都市山科区柁辻池尻町48

〔人事異動〕

神奈川県立博物館

新館長 北林一光、旧館長 高橋繁蔵

通信博物館

新館長 和田敏夫、旧館長 板倉豊文美

あ と が き

○全科協ニュース（通巻第32号）をお届けいたします。このところ発行の遅れが続いて、御迷惑をおかけしておりますことをおわびいたします。第7巻からは本来のペースに近づけていきたいと思っておりますので、よろしく御協力をお願いします。

○このニュースは、全科協加入館園の皆様との連絡誌でもあり、科学博物館の運営等に役立ちそうなものであれば、どのような記事でも結構です。どうぞ、お気軽にこ

のニュースを御利用いただき、投稿されるようお待ちしております。

○全科協の本年度の事業計画のうち、「科学博物館便覧—みんなの科学博物館—（仮称）」の発行については、その編集内容について検討をすすめております。具体的な掲載項目が決まり次第、各館園の紹介記事等について原稿をお願いすることになりますので、その節はよろしくお願いいたします。（事務局）

 会員館園の紹介

齋藤報恩会自然史博物館

所在地 仙台市本町2-20-2 ☎ 980

電話 0222-62-5506

休館日 月曜日、年末年始

(月曜日が祝祭日の時その翌日)

おいたち

博物館は昭和8年11月に、(財)齋藤報恩会の直接事業の一つとして、人文、自然の総合博物館として開始されて当時の地方博物館としては貴重な存在であった。また(財)齋藤報恩会は学術研究助成団体としての性格から、博物館での研究活動に対する助成による、研究論文の発表は、国内はもちろん、海外の博物館、研究所、大学との交換、交流が非常に活発で、博物館の研究活動としては、はなはだユニークな存在であった。その結果、最盛時における博物館の資料は約30万点に及んだが、戦時中の館の一部焼失と、戦後の経済変動の波にあらわれて、博物館活動はほとんど停滞し、研究助成による学術研究論文の発表の継続と、残された資料を公開展示してきた。

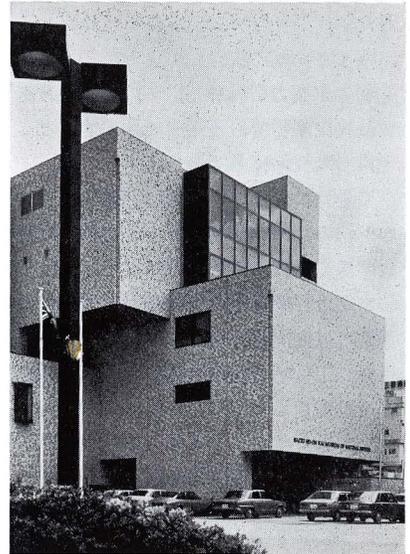
たまたま昭和48年は、(財)齋藤報恩会設立満50年(大正12年設立)に当たり、その記念事業として、会館の建て替えを計画し、同時に現代に適応した博物館として、内容を一新することに決定し、以来約3年の休館を経て昭和51年11月3日、自然史博物館として、新装再開館することになった。

あらまし

博物館は今後、新たな活動に入ることになるが、1階、2階を常設展示室とし、3階は特別展示室となっている。1階は「古生物、鉱物」等地学関係、2階は動物、植物関係として計画され、今回の開館に当たっては、第1期工事として、1階展示室の地学関係の展示のみを公開し、2階の動物、植物関係は第2期工事として、3～5年後の完成を目標としている。

展示内容については、アメリカ・ユタ州立大学附属博物館の、マドセン氏の製作による、恐竜「アロザウルス」の骨格レプリカが寄贈されたため、これを軸として仙台を中心に、東北地方全体に拡がりをもつように計画し、展示資料は収蔵資料と収集、購入、寄贈により充足した。2階の動物、植物関係については、すでにパイロットプランも完成している故、このプランに従って今後資料の整備に当たり、充分の時間をかけて完成させる予定である。

今後の館の活動は、職員構成の問題と、財団の研究助成団体という性格から、研究活動が主体となり、館とし



ていささか活動の遅れている、一般教育普及活動の面を充実してゆく積もりである。

展示の内容にしても、学芸員、研究員等のこれからの研究テーマにより、展示替え等も行われることが考えられるため、余り特色とか、性格等にこだわることなく、機動性をもった、中身の濃い資料の展示公開を原則としてゆくとする。

また、収蔵資料として、不確定ではあるが、考古関係も含め、地学動物関係(植物関係は僅少)で約8万点と推定される資料があるので、今回の再開館を期して、目下整理に努力中であり、今後一般研究者にも利用できる資料として鋭意整備中である。

むすび

今回の開館に当たっては、1階の地学関係のみの公開のため、2階を開館記念特別展として、国立科学博物館の御協力を得て「化石と進化展」を公開し、再開館に大変な御援助を得たことを紙面を借りて感謝する次第です。

新装再開館はできたものの、未だ順調に活動には未整備の面が多く、また第2期工事としての2階展示室も残っていることでもあります故、全科協、会員館諸兄の今後の御指導と御協力があって初めて完成されるものと考えますので、よろしくお願い致すこととして再開館の報告と致します。

展示のディスプレイ、インテリア等は株式会社科学造型センターにて実施してもらい、特に佐々木朝登氏によるところ、大なるを附記して謝する次第です。

(理事 齋藤温次郎)